

## 「私たちは二つの命を持っている。」

2019.2.12 遠藤清賢

私は信仰を告白し、洗礼を受けたのは1971年5月でした。20歳の時です。あれから47年が過ぎました。多くの人たちが私の為に祈り、支えて下さいました。そのことによって私は神様の豊かな祝福の中で今を生きることが出来ています。朝は信仰を共にする妻の祈りから始まります。教会生活とともに保育と言う尊い働きも与えられています。全てが満たされ、神様のお支えによって生かされていることを実感し、感謝の毎日をごしています。

最近、私の身体には2つの命があるように感じるのです。一つは神様から貸与されている命でこれを「神の命」と言うことにします。そして、もう一つは私自身の人格を司っている命です。これを「個の命」と呼ぶことにします。自分自身を司っている個の命は、自分の欲望に忠実に生きようとする命であり、神様の働きを忘れてしまい悪に支配されやすい命であると考えています。そして個の命は単独に存在することが出来ません。神様の命によって、この世の中で自分の肉体を生かすことを可能にする命であると考えています。個の命は有限であって肉体の死によって喪失する命です。しかし、神様から貸与された神の命は、永遠の命として死んだときに神様のもとに返される命であると理解しています。人間は信仰を持って初めて神の命の存在を知り得るのですが、神を知らなくとも神の命はそれぞれの人の中に存在しているのだと思います。これが真実かどうかは分かりません。これは私の個人的な考えであり、私は命をそのように捉えています。このように考えながら人間を理解したいと思っています。

現代人は神の命を意識できなくなっているのではないのでしょうか。現代人には「個の命」しか持ち合わせていないのかもしれませんが。「神の命」は信仰によって貸与される命であり、個を神様の意志によってより良く生かそうとする命であると考えます。その神の命が現代人は意識することが出来なくなりました。宗教的意識が日常生活の中で失われています。個の命が神様と一体になって生きていることを私たちは無視し、自分の個の命が増殖し、暴走しているのが私達現代人ではないのでしょうか。神の命の領域に、個人的所有物である個の命が立ち入ろうとしているように感じています。神の命は個人が制御できない命で生と死を、そして善と悪を司る命であると考えます。個の命は、生きる行動を自己の意志によって自由に考え行動できる命であると考えます。この神様の命の領域に個の命が侵入しようとしています。それは遺伝子操作や臓器移植、細胞から新しい臓器を造りそれを壊れた臓器と交換する技術が開発され、実際に行われています。遺伝子操作によってクローン人間を造り出した人もいます。また現代人が優

秀だと考える命を生み出そうとしている技術も考えられているようです。遺伝子診断によって生まれてくる命の障がいの有無も判断できるようになっています。医療は部品交換的な技術的働きになっています。命の倫理、命の不思議、命の有り方、どのように生きるのかと言う推敲は停滞してしまいましたが、いかに生きる時間を長くできるのが人間の生命の課題になっているようです。

命の時間を人間が操作する時代になっているのです。古い臓器を新しい臓器と交換する技術はかなりの速度で進歩しています。神の命の領域に人間は立ち入ろうとしています。神様は私たちの神様への領域に関わっている働きを、どこまでお許しになるのでしょうか。死、誕生、成長、活動、老い、そして再びの死、という命の循環は崩れかかっています。人間は誰でも健康であって、少しでも長く生きたいという本能を持っています。死を自覚することが難しい生き物なのかもしれません。神の命が私たちに死の時を伝えなくなったというより、神様の声を私たちは無視しているのかもしれません。信仰は生きることと同じく、本来あるべき死について私たちに考えさせ、死の時を受容し、その準備を支えているのです。有限の命であるからこの短い時間をいかに有意義に過ごせばよいのか人間は考えてきました。しかし、命の概念が変化しています。命は自然な物であり、人間の力が及ぶものではなかったのですが、人間の力によって命が自然の営みではなく人間が創造するものに変化してきたように思います。医療技術の発達している国では人間の生きる時間が劇的に伸びているのです。生き続けることが人間の幸福なのでしょうか。

このような時代に於いて私たちの精神はより良い方向に向かっているのでしょうか。現実の社会を見れば人間の精神は逆に退化し、衰えているようにしか見えません。利己的な欲望はますます増大し、合理的で痛みの無い便利な社会が理想的な社会であるように考えられています。経済成長が正しい国の方向性のように考えられ、富を蓄積することが国の成長のように考えられています。富の蓄積によって力を蓄えた国は兵器を増強し、大量破壊兵器が国を強くする武器のように考えられています。国家間の格差は大きくなり、貧しい国の人たちはテロや戦争によって富を得ようと争いに明け暮れています。この戦争によって生み出された多くの避難民は、行き場を失っています。どの国も受け入れようとしません。さらに人間は宗教を自分の行動の正当性を表現する手段として自分勝手に解釈し利用しています。人々は互いに傷つけあい、罵り合い、憎みあり、そして殺戮を当然のこゝろのように行う世界になっています。支え合いや優しさは失われました。人間の世界は崩壊寸前です。

私たちの国でも人の心は荒んでいます。殺人事件や子どもを虐待する事件が後を絶ちません。子どもの命を守るべき親が子どもの命を奪ってしまう私たちの社会はどう

なってしまったのでしょうか。人間として当然あるべき命に対する尊さを失ってしまった社会が私たちの社会であり、「神の命」を知り得ない人たちは普通では考えられない行動をしてしまいます。その結果、悲惨な事件が頻繁に起こっています。私たちは「愛する」ということの本質を失っています。「愛する」ことがどんな心でどんな行為なのか分からない社会に生きているような気がします。「愛する」と言う心と行動は人間のあるべき命を育ててきました。その命を育ててきた尊い時間が伝えられなくなってしまいました。今の大人たちは「愛する」心と行動がいかなる行動なのか分からなくなっているようです。命を育み支えることを大切にしてきた命の継承が出来ない社会になっていることに危機感を覚えます。新しい命の誕生を心から喜ぶことを忘れた人間たちの社会が今のこの社会のような気がします。この星で生きるための資格は失われつつあるように思うのです。人間は自分の手で自分の命を傷付けているようです。人間の中にある 2 つの命の内、自己を司る個の命によって、神の命を蝕んでいるようです。

私たちは個の命を神の命の視点で見つめ直さなければなりません。神の命はこの星で生きるための資質を育む命だと私は考えています。この星自体が神の命であり、その一部分が私達の中にある神様から貸与されている個々の人間の個の命であるのです。人間の個の命が利己的な欲望で暴走しないように、神の命と一体になった生き方をするためにはどうすれば良いのか真剣に考えなければなりません。そのために神様は私たちに新しい命を育むための体験を用意しています。その体験とは「子どもの命を守り、成長を支える」と言う体験です。子どもとの関わり合いは、「愛する」ことの真実、本質を経験させてくれるはずで、これを苦しみと捉えるのか、喜びと希望に捉えるのかは私たち次第です。真実の「愛」をもって子どもの命を支えることによって私たちはこの星に生きる資格を与えられるのです。子どもとの関わりを喜ばないにしても、その努力が出来るのなら私たち自身の命も救われると信じています。

子どもの成長を支えるためにはどのような対応が必要なのでしょう。多くの愛情の中で育てられた子どもたちは多様な冒険心、探究心を持っています。そして、多くの人との関わりを喜び、その時を楽しみたいという思いを強く持っています。自分の知らない知識や、未体験の経験や知識を学習することに大きな喜びを持つことが出来るのです。そのような子どもたちに対して私たちは生活支援と様々な遊びと生活体験、学習の機会を提供することであると思います。愛情を持って育てられた子どもたちは、ほとんどすべてを好意的に受け取ります。対人関係においても良い関係を構築することに努力を惜しみません。そのような子どもたちに対して私たちは励ますだけです。様々な遊びと生活体験の中から自然のしくみ、命の循環、命の尊厳、人間としての生き方、神様への恐れ、家族としての絆、友人と交わることの楽しさ、異性への恋心、生きる喜び、そして、生きることの辛さや悲しみ、命との別れ、命のはかなさ、等を自分の実体験を通し、自分自身

の人格を成長させるのだと思います。生きることの本質を命が継続する時間の中で「個の命」を育むのです。これは死のその時まで続くのです。このような子どもたちに私たちがしなければならないことは、自分の体験したことを伝えることです。良いとか悪いとか、貴重であるか無いかは重要ではありません。その判断は子どもたちに任せましょう。私たちは子どもたちを心から愛し、希望を持ち、応援し、支えることです。私自身が喜んで生きている姿を、神様を信頼し、一時一時を大切に懸命に生きている姿を見せてあげることが私たちのやるべきことです。押し付けがましい言葉など必要ありません。本当に大切なことは神様がその時々伝えてくれるはずで、私たちがなすべきことは子どもたちを心から愛していることと、子どもたちが神様の豊かな祝福の中で毎日生きることを、全身全霊をもって神様に祈ることです。